

第一章 女三の宮の物語 持仏開眼供養

[第一段 持仏開眼供養の準備]

*夏ごろ、*蓮の花の盛りに(夏の蓮の花の盛り頃に)、*入道の姫宮の*御持仏ども*あらはしたまへる(入道宮は新造なされた仏壇の仏像数体の)、供養せさせたまふ(開眼法要を催しあそばします)。 *「夏ごろ」は注に<源氏五十歳の夏、「横笛」巻の翌年。>とある。横笛巻が秋の話で終わっていたので、続くこの巻の「なつごろ」は翌年以降のことになる。 *「はちす」の開花時期は今の暦で6月末から8月初めくらいらしいので、陰暦で言えば5~6月の晩夏。 *「入道の姫宮(にふだうのひめみや)」は女三の宮のことだろうが初めての呼称。姫宮の出家は2年前の一月末か二月初めで、既に尼宮や入道の宮との呼称はある。 *「御持仏ども(おんちぶつども)」は注に<『集成』は「お念持仏(身邊に安置して、朝夕礼拝する仏像)の数々をお造りになったのを、開眼供養なさる」。 「あらはしたまへる」「供養せさせたまふ」の主語は、女三の宮。>とある。「持仏」は<守り本尊として居間に安置したり、身につけたりして常に信仰する仏像。念持仏。>と大辞泉にある。ざっと、仏壇や仏間のことだろう。 *「あらはす」は<見えるようにする。分かるようにする。>で、仏像については<新造する。>と古語辞典にある。

このたびは、大殿の君の御心ざしにて(今回は源氏殿の御厚意によって)、御念誦堂の具ども(仏間の仏具類も)、こまかに調べさせたまへるを(念入りに新調させ為さっていたものを)、やがてしつらはせたまふ(そのまま飾り付けなさいます)。*幡のさまなどなつかしう(式場の飾り布の模様などは穏やかで)、心ことなる唐の錦を選び縫はせたまへり(特に手の込んだ唐の錦織布を選んで縫い作らせてありました)。 *「幡(はた)」は一般には<旗>のことだが、仏具では<仏・菩薩の威徳を示すための飾りの道具。大法要・説法などの時、寺院の境内や堂内に立てる。三角形の首部の下に細長い幡身(ばんしん)をつけ、その下に数本のあしを垂れたもの。ばん。>を言うと大辞林にある。ざっと、式場の飾り布か。

*紫の上ぞ、急ぎせさせたまひける(それと紫の上が用意させなされたということの)、*花机の覆ひなどのをかき*目染もなつかしう(お供え台の覆い布の面白い絞り染めも好い風合いで)、きよらなる匂ひ(澄んだ信仰心が)、染めつけられたる心ばへ(染め付けられている趣向は)、目馴れぬさまなり(唐風よりは天竺風で目新しいものでした)。 *「紫の上」も在家ということだが入信者だ。「ぞ」の強調は「けり」の特筆感からして、特に仏道に通じている者、という意味合いがあるように感じられる。 *「はなづくゑ」は<仏前に据えて経文・仏具などを載せる机。脚に花形の彫刻がなされる。一説に、仏前に香花を供える机。>と大辞泉にある。ざっと、お供え台、と思って置く。 *「目染(めぞめ)」は<鹿の子絞り。絞り染。>と注にある。細かな絞り染めの風呂敷などは、私には妙にインド風に見える。

夜の御帳の帷を(よるのみちやうのかたびらを、寝台の垂れ幕を)、四面ながら上げて(よおもてながらあげて、四面とも巻き上げて)、*後ろの方に(後ろ側に)*法華の曼陀羅(ほっけのまんだら、本尊の曼荼羅図を)かけたてまつりて(掲げ申して)、銀の花瓶に(しろがねのはながめに)、高くことことしき*花の色を調べてたてまつり(茎の高い見事な蓮の花を仏事らしく飾り立て申して)、名香に(みやうがうに、仏前香に)、唐の*百歩の薫衣香を焚きたまへり(からのひやくぶのくのえかうをたきたまへり、輸入品の百歩香をお焚きなさいました)。 *「うしろのかた」の方角は何処か。とは即ち、この法会の正面は何処か。この母屋の生活感はとても分かり難いが、形式上で考えるなら、御帳台は南正面が穏当に思えるが、若菜下巻七章四段の問題の藤君が姫宮の寝所に押し入った時の描写に、小侍従

は藤君を「よき折と思ひて、やをら御帳の東面の御座の端に据ゑつ」とあって、人目を避けるためか御帳台の東側出入りに案内していた。宮は母屋の西側半分を使っているの、東側は部屋で言えば戸の無い壁側、すなわち裏側に当たる。ただ、その時でも御帳台の設置自体が東正面だとは語られておらず、むしろ壁側を正面にはしないような気はする。また、昼の御座は南庭に面した南正面が好ましい気がするが、此処では「夜の御帳の帷」とあり、寝台は西正面だったのかも知れない。が、何れ明示は無く私には判じかねる。ただ、先読みで不本意だが、下に「宮のおはします西の廂」(二段)とあり、宮が南西ではなく西廂に御座していたとなると、この「後ろの方」は東側、とは即ち、法会正面は西向きということなのかも知れない。が、そうすると、僧侶や列席諸侯は南廂になってしまい、列席者はともかく僧侶、特に高僧が花台の右側面から読経を奉じるといのは何とも具合が悪く見える。で、良く分からない。ながらも、それでもこの会場の壁側はやはり東側になりそうな気はする。 *「法華曼陀羅」はく密教で法華法を修する際に本尊として用いる曼荼羅図。中央の宝塔内に釈迦(しゃか)・多宝の二仏を、周囲に菩薩(ぼさつ)・声聞(しょうもん)・明王・諸天などを配したもの。 >またはく法華經の説法の会座を描いた図。 >と大辞泉にある。後者は和やかな講座の印象で姫宮らしい気もするが、やはり法会なので<本尊の曼荼羅図>なのだろう。画像としては多くをサイト上で閲覧できる。が、それ以上の曼荼羅図自体の意味については難解過ぎて敬遠する。また、日蓮の文字曼荼羅を法華曼荼羅とも言うようだが、日蓮(1222~1282)は後世の人なので此処では該当しない。 *「花」は訳文に<蓮の花>とある。段頭に「蓮の花の盛りに」とあったので、従いたい。「色をととのふ」はく情趣に合わせる >ような気がする。 *「百歩香」については「平安樂舎」サイトに復元したとの記事があり興味深い、そこに踏み込むほどの根は私にはない。

*阿弥陀仏、脇士の菩薩、おのおの*白檀して作りたてまつりたる、こまかにうつくしげなり(阿弥陀仏と脇侍の観音菩薩と勢至菩薩の三体はそれぞれ白檀でお造り申してあって、精緻で申し分ない出来栄えのようです)。 *「あみだぶつ、けうじのぼさち」は注に<阿弥陀仏とその脇士の観音菩薩と勢至菩薩。 >とある。「阿弥陀仏」は「南無阿弥陀仏」の題目で耳に馴染みがある。「観音菩薩」は観音像を良く目にするし、何となく母性の優しさの印象があるが、元々の性別は女では無い様な記事もある。「勢至菩薩」は「せいしぼさつ」という名前を何処かで聞いたくらいで印象が薄い。が、何れにしても、詳しいことは分からないし、他ならずこの三体を奉る仏教上の意味は何かあるのだろうが、敬遠する。 *「白檀(びやくだん)」はくビャクダン科の半寄生常緑高木。インドから東南アジアにかけて産し、約二〇種がある。心材は淡黄色で堅く芳香があり、仏像や扇の材として珍重される。細片は香にし、また白檀油を得る。 >と大辞林にある。

*閼伽の具は(お供え物一式は)、例の(日々の修行と同じに)、きはやかに小さくて(際立って小じんまりとして)、青き、白き、紫の蓮を調へて(お供え水に青と白と紫の蓮の花を生けて)、*荷葉の方を合はせたる名香(荷葉香のお供え香に)、蜜を隠し*ほほろげて(蜜を崩し敷いて)、焚き匂はしたる(焚き匂わせてあって)、一つ薫りに匂ひ合ひて(甘い香りが一つに匂い合わさって)、いとなつかし(とても印象深い)。 *「閼伽の具(あかのぐ)」は古語辞典に<仏への供え物の容器。 >とあるようだが、「閼伽」は<お供え水>ともあり、「例の、きはやかに小さくて、青き、白き、紫の蓮を調へて」が容器の説明なのか如何かも分からず、下に名香の様子が説明されることからして、この「具」は<一式>であって、「閼伽」がこの日の法事本尊供養物を指すものと読んで置きたい。 *「荷葉の方(かえふのはう)」はく夏の薫香。 >と注にある。「荷葉(かえふ、かよう)」はくハスの葉。 >と古語辞典にあり、また<薫物(たきもの)の名。いろいろな香を練り合わせて作る。ハスの花の香に準えたもの。 >ともある。 *「ほほろぐ」はくばらばらにする。ほぐす。 >と大辞林にある。ただし、此処の文が例文引用されているので傍証性はない。

経は(入道宮の奉納写経は)、*六道の衆生のために六部書かせたまひて(六道亡者の救済のための観音利益をそれぞれの道ごとに六部お書きあそばして)、みづからの御持経は(御自身の護り経文は)、院ぞ御手づから書かせたまひける(源氏殿が写経あそばしたもので、)。これをだに(子宝を結ぶことに失敗した二人の結婚だが、せめてこれだけは)、この世の結縁にて(現世の御縁の記念として)、かたみに導き交はしたまふべき心を(互いに極楽浄土への導きを念じなさろうという気持を)、願文に作らせたまへり(願文にお作りあそばしました)。 *「六道(ろくだう)」はく仏語。衆生がその業(ごう)によっておもむく六種の世界。生死を繰り返す迷いの世界。地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天道。六趣(ろくしゅ)。六界(ろっかい)。>と大辞泉にある。「六道の衆生(ろくだうのしゅじやう)」は現世での悪行のために成仏できずにその六道を繰り返しさ迷う靈魂の事を言うらしく、Yahoo! 百科「六道」項に「日本では六道輪廻の語が定着している。六観音(かんのん)、六地藏(じぞう)は、観音菩薩(ぼさつ)や地藏菩薩が六道のそれぞれに姿を現し、迷える衆生を済度(さいど)するという思想を象徴したものである。」とあるので、此処で入道宮が写譜した経文は観音様に救済を願う願文なのだろう。また、「みづからの御持経は」と別記があるので、入道宮は自分の死後ではなく、万民のための願いをする功德修行として写経した、ということのようだ。そう読む他に筋の捉えようが無いこの文だが、そう読んでも私には何のことか分からない。

さては、阿弥陀経(殿はその他にも阿弥陀仏經典を)、唐の紙はもろくて、朝夕の御手慣らしにもいかがとて(唐の紙はもろくて入道宮の朝夕の写経手本に不都合かと)、紙屋の人を召して(紙屋院の責任者を呼び寄せて)、ことに仰せ言賜ひて(特別にご用命をお下しなさって)、心ことにきよらに漉かせたまへるに(念入りに美しく漉かせなされた紙屋紙に)、この春のころほひより(今年の初めから)、御心とどめて急ぎ書かせたまへるかひありて(この日のために準備してお書きあそばされた甲斐がある出来栄えで)、端を見たまふ人びと(その一端でも見た人は)、目もかかやき惑ひたまふ(その素晴らしさに目を奪われて驚嘆します)。

罫かけたる金の筋よりも(けかけたるかねのすぢよりも、行線を引いた金泥の線よりも)、墨つきの上にかかやくさまなども(文字の墨の色が輝いている様子なども)、いとなむめづらかなりける(何とも見事なものなのでした)。軸(ぢく)、表紙(へうし)、笥(はこ)のさまなど、いへばさらなりかし(言うまでも無く立派です)。これはことに(是は特別に)沈の花足の机に据ゑて(ぢんのけそくのつくゑにすゑて、沈木の花彫刻足付きの台に置いて)、仏の御同じ帳台の上に飾らせたまへり(仏像を安置奉った天蓋座の床上に入道宮は飾りあそばしました)。

[第二段 源氏と女三の宮、和歌を詠み交わす]

堂飾り果てて(お堂飾りが終わって)、講師参う上り(かうじまうのぼり、お坊様も参上し)、*行道の人びと参り集ひたまへば(参列の高官たちも揃いなされたということで)、院もあなたに出でたまふとて(殿も式場にお出向きなさろうと)、*宮のおはします西の廂にのぞきたまへれば(宮がいらっしゃる西の廂を覗きなさると)、狭き心地する仮の御しつらひに(手狭な感じのする仮の御座所部屋に)、所狭く暑げなるまで(窮屈に暑苦しいほど)、ことごとしく装束きたる女房(仰々しく礼装をした女房たちの)、*五、六十人ばかり集ひたり(五、六十人ほどが集まっていました)。 *「ぎやうだうのひとびと」は注にく大島本「行た(=か、か<朱イ>)うの人/\」とある。『集成』は本文を「行香の人」とし、「法会の時、僧に香を配ること。殿上人が勤める」と注す。『完訳』は「行道の人々」とし、「仏像の周囲を巡り歩く礼法。「行香」とする本も多い」と注す。>とある。「参り集ひたまへば」と敬語遣いなので高官

なのだろう。*「宮のおはします西の廂」は注に<『集成』は「寢殿の西面の西の廂。女三の宮の常の居間である母屋は法会の場になっているので、西廂に移っている」と注す。>とある。ただ、「法会の場」は寢殿西側全体で、母屋は「堂」なのだろう。にしても、この開眼法会の願主である宮の御座が西廂ということは、お堂は西正面に設置されている、ということか。また、下には女房たちが北廂に控えたとの記事もあるので、南廂はいよいよ貴賓席の趣だが、読経首座の高僧だけは西廂の御簾内を許されたのだろうか。さっぱり分からない。*「ご、ろくじふにんばかり」はく女三の宮付きの女房の勢揃いであろう。五、六十人伺候していた。>と注にある。一大消費勢力だ。が、彼らは優雅な財の浪費で豊かさの創造を競う社会の選抜者有能集団でもある。財の生産者たちにとって休息である遊びは、貴族にとっては休息ではなく業だ。生産者であろうと消費者であろうと、業を愉しめる者は人生の勝者なのだろう。業を楽しめない者に休息の安らぎは無いからだ。

北の廂の簀子まで(北廂の縁側まで出て)、*童女などはさまよふ(童女や若女房などは立ち動いています)。火取りどもあまたして(その者たちが香炉をたくさん使って)、煙たきまで扇ぎ散らせば(煙たいほどに名香を母屋や南廂のほうへ扇ぎ送っている)、さし寄りたまひて(殿は近付きなさって)、*「わらはべ」は注に<女房以外の女童は北の廂をはみ出して簀子に伺候した。>とある。

「空に焚くは(そらにたくは、部屋に香りを漂わせるには)、いづくの煙ぞと思ひ分かれぬこそよけれ(何処で煙が立っているのか分からないくらいなのが良いのだ)。*富士の嶺よりもけに(富士山の噴煙以上に)、くゆり満ち出でたるは(煙を上げさせているのは)、本意なきわざなり(物を知らない遣り方だ)。*「ふじのみねより」は注に<富士山の噴煙よりも多く煙が出ている意。当時の富士山は噴煙を上げていた。伊勢物語、更級日記等参照。>とある。是は新鮮な驚きだ。そして、新鮮な驚きであることが不快だ。こうした天変地異については、1000年程度前の記事は古文書ではなく現在資料だ。専門家はこうした記事にもそれなりに注視しているのだろうし、途方も無い規模の天災に対しては人は余りに小さい存在かも知れないが、概してこの国のこうした貴重資料に対する一般認識の乏しい現況が放置されている集合知の獲得利用意識の低さには、非常に危惧を覚える。

講説の折は(かうぜちのをりは、読経中は)、おほかたの鳴りを静めて(およそ物音を立てずに)、のどかにももの心も聞き分くべきことなれば(静かに経典の教えの理解に努めなければならないので)、憚りなき衣の音なひ(無遠慮な衣擦れや)、人のけはひ(雑事の物音は)、静めてなむよかるべき(立てぬが良い)」

など、例の(などと例に拠って)、もの深からぬ若人どもの用意教へたまふ(物を知らない宮付きの若女房たちに法事の心構えを教えなさいます)。宮は、人気に圧されたまひて(宮は人の多さに圧倒されなさって)、いと小さくをかしげにて(本当に小さく可愛らしくしていらして)、*ひれ臥したまへり(殿に深くお辞儀をなさいます)。*「ひれふす」はく横になる>のではなく<平伏する>。殿の着座に礼をしたのだろう。

「若君、らうがはしからむ(若君が駄々を捏ねてはいけない)。抱き隠したてまつれ(奥のお部屋に抱いてお隠し申し上げなさい)」

などのたまふ(と殿が乳母に仰います)。

北の御障子も取り放ちて(きたのみしやうじもとりはなちて、母屋の北廂との御襖も取り払って)、御簾かけたり(御簾を掛けてあります)。そなたに人びとは入れたまふ(殿はその北廂に女房たちをお入れなさいます)。静めて(皆を静かにさせて)、宮にも、*ものの心知りたまふべき下形を聞こえ知らせたまふ(宮にもこの持仏儀式を前にして破綻した結婚の不幸を踏まえて頂くべく一般論をお聞かせ申しなさいます)、*いとあはれに見ゆ(今さらに残念な光景で、とても印象深い場面です)。*「ものの心」は渋谷訳文に<法会の内容>とあり、与謝野訳文に<今日の儀式についての心得>とある。が、いよいよ法事が始まろうというこの時に、今さら<持仏開眼供養の意味や作法>を殿が宮に説くとは思えない。宮が入信したのは二年前の春でもう三年目の入道者であり、入信時に離俗別寝したのだらうし、今まで教典も学んできて、私には分からないが、恐らく「持仏」は<修行方法の決定>みたいなもので愈々本格的な修行生活に入ることを意味するのだらうし、本尊を釈迦や大日や薬師ではなく阿弥陀如来に選び定めたことにその具体的な修行内容が規定されたりするのだらう。だから其等は事前に検討される。その決定儀式に臨んで、その儀式の意味を説くというのは丸で変だ。私は、この「ものの心」は<こういう事態になった意味>であり、その「こういう事態」とは<子育ての充実を共に分かち合えない不幸な結婚>であり、それは殿の悲しい「心」でもあるが、同時に双方の<責任の自覚>でもあり、敢えて其れを一般的な道理として、遂にこの決定儀式を前にして、そういう忘れてはならない世俗の義理を今一度「宮にも」念押しして置きたい<恨み>なのではないか。「下形(したかた)」は<ひな型>や<下話>という意味らしいが、此处では<基礎知識としての一般論>と取って置く。その「基礎知識」とは若出家の悲哀だったり、若君が母宮の王家姿を見れないことや母宮から王家の伝統様式や仕来たりを授けられないこと、あたりだらうか。*「いとあはれに見ゆ」は誰が対象か、また誰が主語か、分かり難い。殿が宮を見て、か、殿を女房が見て、か、私は、強いて言えば敬語が無いので、全体の場の印象の語り手の地文と見て置く。

御座を譲りたまへる仏の御しつらひ(宮が日頃の御座を仏座にお譲りなされたお堂の飾り付けを)、見やりたまふも(見遣りなされては)、*さまざまに(殿はさまざまに感慨に)、*さまざまに」は注に<『完訳』は「源氏は宮の御帳台を見て、これまでの夫婦仲、宮と柏木の密通などを回想、複雑な思念を抱く」と注す。>とある。此处でこう注しながら、上文の「ものの心」を<法会の内容>と解するのは疑問だ。

「かかる方の御いとなみをも(こういう形での御法要を)、もろともに急がむものとは思ひ寄りざりしことなり(一緒に準備しようとは思ひも寄りなかつたことだ)。よし(では)、後の世にだに(せめて来世の)、*かの花の中の宿りに(極楽の蓮華の花で佳人を待つ)、隔てなく(親しい仲の私たち)、とを思ほせ(なのだと思ってください)」 *「かの花の中の宿り」は注に<『集成』は「極楽の往生人は、蓮華の上に半座をあけて同行の人を待つとされた」と注す。『河海抄』所引、五会讃。>とある。全く与り知らない識見なので偏に頼る。多分に、御座(おまし)=御帳台を蓮の花に見立てたイヤラシイ連想の語り口。

とて、うち泣きたまひぬ(と言ってお泣きなさいました)。

「蓮葉を同じ台と契りおきて露の分かる今日ぞ悲しき」(和歌 38-01)

「先を誓って笑っても今日の別れに泣けてくる」(意識 38-01)

*注に<源氏から女三の宮への贈歌。主旨は、一蓮托生と約束したが、別々に暮らすのが悲しい。「蓮葉」「置き」「露」が縁語。>とある。そうか、「はちすばをおなじうてなとちぎりおきて」は一蓮托生のことか。だが、「一蓮托生」には<毒を食らわば皿まで>みたいな、どうせ汚れてしまったのだから最後まで一緒に運を天に任せよう、とい

う幾分と投げやりな、また少し負の印象が付きまとう語感で、現代語では不思議と有難味が薄い。また大辞林には
<仏 死後、極楽の同じ蓮華(れんげ)の上に生まれ変わる事。仏典にはなく、日本の浄土信仰から生まれた考え。
>ともあって、何か独特の逸話でもありそうな語だが、子細不詳。

と(と殿は贈歌を)、御硯に*さし濡らして(御硯に筆の先を差し濡らして)、*香染めなる御扇に
書きつけたまへり(極楽花を思わせる香染めの御扇子に書き付けなさいました)。 *「差し濡らす」
は<露の雫>に掛けた言い方、なのだろう。 *「かうぞめなるおんあふぎ」は<蓮葉>に見立てた、のだろう。「香
染め」は<丁子(ちょうじ)を濃く煎(せん)じた汁で染めたもの。黄色味を帯びた薄茶色。>と大辞泉にある。漢方薬
や香辛料にも用いられる丁子(クローブ)がインド天竺を連想させるのか、染め色は薄茶色とのことで色ではなく、
「香染め」の名の通り香りが極楽の花を思わせたらしい。

宮(宮が御返歌を)、

「隔てなく蓮の宿を契りても君が心や住まじとすらむ」(和歌 38-02)

「口先だけの真心も今となつては懐かしい」(意識 38-02)

*注に<女三の宮の返歌。「蓮」「契り」の語句を引用して、「君が心やすまじとすらむ」と切り返す。「すまじ」
は「住まじ」と「清まじ」の掛詞。>とある。物怖じ一辺倒だった姫宮が、王家の華やぎに自ら幕を下ろして、愈々
本格的な修行生活に入るといふ段になって今やと、憎まれ口の一つも利いた、というところか。晩生で才気も無い
けれど、それでも血の通った人間で、ただの人形じゃない。大人の世界に放り出された子供のようにあつても、
紫の上に後れを取った悔しさは、父から託された正統王家の誇りを自負すればこそ、無視出来なかった。涙ながら
に衛門督に身を任せたのも、今にして思えばその悲しみがあつたからこそだった。みたいな。話の流れから読むこ
の歌の味わいは、そんな感じだろうか。朱雀院にとって正統性は本質だが、源氏殿にとっては、それは尊いながら
も属性に過ぎない、という立場上共有し得ない認識の違いが生んだ悲劇、のようにも見える。引いて見れば、やは
り朱雀院の判断に無理があるか。正当性の自覚は君主たる王が自らを律するために持つべき価値観であつて、その
立場に無い臣下にその崇高な精神を期待するのは生活感が欠如している。自分で食い扶持を稼ぐ普通の人にとって、
正統性は価値はあるが、それだけに有効な取引材料の一つだ。管理職にとっては調整こそが本質であり、王の正統
性それ自体ではなく、他者がそれを如何評価しているかという、他者の価値観こそを注視する。今日の間社会の
組織構造としては、一王家や特定宗旨の文化価値は地球上の全人類に普遍的に受け入れられるものではないとして、
その標準規格を形成し得ない要素と考えられるのが主流のようだが、多様性を失った世界に広さは無いし、可能な
限り伝統様式を受け継いで行く事が祖先を敬い、延いては今の自分を意味あるものにする生き方だという言い方は、
今なお広く支持されているように思う。しかし、財の流通は人の暮らしを豊かにするし、その円滑な流通には単位
を共通規格にする事が不可欠だし、学識の集合知を得るためにも共通の基礎認識が必要だ。難しいところだが、そ
の時点での最適値というものを探し続ける他は無いのかも。この歌は、殿の口先だけの空手形の虚偽性を恨むのか、
本気じゃない不誠実を恨むのか、騙す心算ならどちらも罪深い、宮はあえて座興の冗句と笑い飛ばした。その上
で、やはり不誠実が悲しいんじゃないかな。

と書きたまへれば(とお書きになれば)、

「いふかひなくも思ほし朽たすかな(水に向けても憎まれ口とはね)」

と(と殿は)、*うち笑ひながら(苦笑しながら)、なほあはれとものを思ほしたる御けしきなり(今なお宮に未練を残していらっしゃる御様子です)。 *「うちわらふ」は注に<苦笑>とある。従う。

[第三段 持仏開眼供養執り行われる]

*例の、親王たちなども、いとあまた参りたまへり。 *「例の」は注に<「例の」は「参りたまへり」を修飾する。したがって、「例の」の下に読点必要。>とある。「の」が直接「親王たち」を説明する関連助詞でないのなら、「例の」は<いつものように>という言い方の副詞にも見える。確かに其も分かりにくい語用だが、だとしても寧ろ大きな疑問は、此処の「みこたち」は誰か、という点だ。姫宮を迎える前の、十年位前までの六条院なら、「親王たち」といえば、源氏殿の弟宮の桐壺帝の<御子たち>が主だったところかと思うが、今や今上帝の弟宮たち、とは即ち朱雀院の<御子たち>が姫宮の弟宮でもあり、源氏殿の甥宮にも当たるので、六条院での、それも姫宮の儀式ともなれば、彼らの参列もありそうな気がする。が、今までに朱雀院の御子たちについては、今上帝と姫宮と女二の宮の他には個別の説明はおろか、概略すら示されていない。女宮の外出列席は有り得ないようなので、此処では男宮たちに限られるだろうが、朱雀院の男宮たちは今上帝以外に全く触れられていない。また、源氏殿の弟宮たちについても、兵部卿宮が何度か登場している他は全体の数も明示されていないし、当然近況も知れない。そう言えば、花宴巻に引っ張り出されていた朱雀院の妹宮たちは今どうしているのだろう。ふと、そんなことまで気になって来る。更には、冷泉院についても非常に記事は少ない。というのに、然も諸般の事情は御案内の通りとばかりに、此処で平然と「御子たち」と語られる。専門家による後先読みの注も無く、言い換え不能だ。

*御方々より(殿の御夫人方から)、*我も我もと営み出でたまへる*捧物のありさま(皆々が自分も功德を施そうと捧げ出しなされた仏前のお供え物の数々は)、心ことに(上等な品々が)、所狭きまで見ゆ(花台に所狭しと溢れていました)。 *「御方々」は注に<六条院の源氏のご夫人方をさす。>とある。ということは、紫の上と花散里と明石御方のこと、だろうか。法事なら二条院の空蟬も出家者なので志がありそうだ。が、物の数ではないのだろうか。まさか死んではいないだろうに。ともあれ、六条院は明示しない方が良さそうだ。 *「我も我も」はこの場合、先を競う、のではなしに、皆々が自分も、とに見える。「いとなむ」は仏事では<修行する=善行を積む>。御方々も皆高齢なので死後の六道が案じられるのだろう。 *「捧物」は「ほうもち」と仮名がある。お供え物。

*七僧の法服など(この日の主だった僧の法衣などの準備は)、すべておほかたのことどもは(全て一通りのことは)、皆紫の上せさせたまへり(皆紫の上が手配なさいました)。 *「七僧(しちそう)」は<法会するとき、重要な役を勤める七人の僧。講師・読師・呪願師・三礼師・唄師・散花師・堂達のこと。>と大辞泉にある。「講師(こうじ)」は<法会するときなどに、高座に上がって経文を講義する僧。>。「読師(どくし)」は<講師と相対して仏前の高座に上り、経題・経文を読み上げる役目の僧。>。「呪願師(じゅがんし)」は<法会するとき、呪願文を読む僧。>。「三礼師(さんらいし)」は<読経のはじめに三礼の唄(ばい)を曲節をつけて唱える。三礼。礼師。>。「唄師(ばいし)」は<法会(ほうえ)で、唄(ばい)を唱える役の僧。>。「唄(ばい)」は<声明(しょうみょう)の一種。漢語または梵語(ぼんご)で偈頌(げじゅ)を唱えるもの。短い詞章を一音一音長く引いて、揺りなどの節を多くつける。如来唄・云何唄(うんがばい)など。>。「散花師(さんげし)」の「散花(さんげ)」は<梵唄(ぼんばい)のあとにシキミの葉あるいは花を散布すること。また、紙製の蓮華の花びらを花筥(けこ)に入れ、散布すること。>とのこと。「堂達(どうたつ)」は<法会を指揮する会行事(えぎょうじ)の下にあつて、導師に願文を、呪願師(じゅがんし)に呪願文を伝達する役。>。こうなってくると、やはり仏壇は南正面で僧たちは南廂で読経し、宮や殿は堂

の西側の御簾内に居たような気がしてくる。が、そうすると、北廂の女房たちは仏壇堂の裏側の御簾内に居たことになる。別に当事者たちが納得していれば如何いう配置でも私は構わないが、何ともはっきりしない。

綾のよそひにて(綾織の紋柄で)、*袈裟の縫目まで(袈裟の小布の縫い合わせ具合まで)、見知る人は(違いの分かるような僧は)、世になべてならずとめでけりとや(世に滅多に無い見事なものだと褒めたそう)。むつかしうこまかなることどもかな(手間の掛かる細々とした作業なのでしょう)。*「袈裟(けさ)」は<インドで仏教者の着る法衣(ほうえ)のこと。中国・日本では衣(ころも)の上に左肩から右腋下へかける長方形の布をいう。インドの法衣が形式化したもので、小さい四角の布を縫い合わせて作り、中国・日本では次第に色や布は華美なものを用いられるようになった。宗派によって各種の形式のものがある。功德衣。無垢衣。福田衣。忍辱鎧(にんにくがい)。卓衣。>と大辞林にある。粗末な端布を縫い繋いで法衣にしたという古い習わしを踏襲して、小さな布を縫い合わせて作るらしく、「袈裟の縫目」とは、その縫い合わせ具合のこと、なのだろう。

講師のいと*尊く(講師が実に尊厳を持って)、*ことの心を申して(この供養の意義を申し述べて)、この世にすぐれたまへる盛りを厭ひ離れたまひて(今生での二品内親王という優れて高貴でいらっしゃる身分の栄華な暮らしを敢えて離れなさって)、長き世々に絶ゆまじき御契りを(行く末永く添い遂げるべくする御結婚を)、法華経に結びたまふ(六条殿と別れて法華経への信心にお決めなさるといふ)、尊く深きさまを表はして(宮の御意向の尊く深い意味を説いて)、ただ今の世の(現下の)、才もすぐれ(学識も確かで)、豊けき*さきを(声の良い美辞麗句を)、いとど心して言ひ続けたる(ますます心を込めて読み上げ続けたのが)、いと尊ければ(本当に有難味があって)、皆人、しほたれたまふ(列席者は皆、涙を流しなさいます)。*「たふとし」はくりっぱである。>と古語辞典にある。*「ことの心」は式辞として<この儀式の主旨>を講じ上げる。源氏殿が宮に話した「ものの心」とは違う。*「さき(先)」は<《「ら」は接尾語》弁舌や筆勢に現れた才気。>と大辞泉にある。口先から実際に声に出している美辞麗句、らしい。

これは(この持仏開眼供養は)、ただ忍びて(ただ内々での)、*御念誦堂の初めと思したることなれど(御念誦堂の開き初めとお考えになっていたことだったが)、内裏にも、山の帝も聞こし召して、皆御使どもあり(帝にも朱雀院にもお聞き知りあそばして、どちらからも御見舞品を具した御使者がありました)。御誦経の布施など(読経僧への謝礼品などが)、いと所狭きまで(実に所狭しと贈られて)、にはかになむこと広がりける(急に事が大きくなったのです)。*「御念誦堂」は「おねんじゅだう」と読みがある。専用の念仏堂や仏間の事を言うようだが、此处では御帳台を飾ったような説明だったので、ほとんど仏壇くらいの印象だ。

院にまうけさせたまへりけることどもも(六条院殿に於いて準備させなされた事々も)、削ぐと思ししかど(簡略にはお思いになったが)、世の常ならざりけるを(世間並みではない豪華さだったのを)、まいて(その上に)、今めかしきことどもの加はりたれば(今の権威筋からの捧物類が加わったとなれば)、夕べの(夕べの散会時に)寺に置き所なげなるまで(寺に置き切れなさそうなほど)、所狭き勢ひになりてなむ(両手一杯に捧物を抱えた有様で)、僧どもは帰りける(僧たちは帰っていったのです)。

[第四段 三条宮邸を整備]

今しも(殿は供養も果てた今のこの期に及んで)、心苦しき御心添ひて(宮の出家を残念に思う御気持が増して)、はかりもなくかしづききこえたまふ(この上なく丁重に接しなさいます)。

院の帝は(朱雀院は)、この(この際に)*御処分の宮に住み離れたまひなむも(御相続なされた宮邸に離れ住みなさるのも)、*つひのことにて(出家した以上は、結局は別居なさるのだから)、目やすかりぬべく聞こえたまへど(世間体も良いだろうと申して来なさるが)、*「御処分の宮(ごさうぶんのみや)」は<御相続なされた宮邸>という言い方で、柏木卷二章三段に二年前の出家の場面で朱雀院の思惑として「御処分に広くおもしろき宮賜はりたまへるを、繕ひて住ませたまつらむ」と語られていた。注には<朱雀院から女三の宮に遺贈された三条宮邸。>とある。「三条宮邸」とは未だ語られていないので、後述明記されるのだろう。*「つひのこと」は<結局はそうなること。>と古語辞典にある。注には<『完訳』は「出家の身ゆえ、どうせ別居するのだから、居間のうちが世間体もよかろうと。その時期が遅れては、世人が疑念を抱くだろう、の判断」と注す。>とある。

「よそよそにては(別居では)、おぼつかなかるべし(様子が分からない)。明け暮れ見たてまつり(毎日お目にかかり)、聞こえ承らむこと怠らむに(御用を承ることを怠らないのが)、本意違ひぬべし(私の本分です)。げに(確かに)、あり果てぬ世いくばくあるまじけれど(余生は残り少ないだろうが)、なほ生ける限りの心ざしをだに失ひ果てじ(それでも生きていく限りは御世話申す結婚当初の気持だけは失うまい、と存じます)」

と聞こえたまひつつ(とお返事申しなさりつつも)、この宮をもいとこまかにきよらに*造らせたまひ(その遺贈分の宮邸をととても手厚く美しく補修管理させなされて)、御封の物ども(宮分の俸禄の品々や)、国々の御荘、御牧などより奉る物ども(諸国にある荘園や牧場などから納められた品々の)、はかばかしきさまのは(優れた品物は)、皆かの*三条の宮の御倉に納めさせたまふ(皆その三条宮邸の御倉に収納させなさいます)。*「造らせたまひ」は注に<「せ」使役の助動詞。『集成』は「念入りに立派に改築させなされて」と訳す。>とある。ただ、「宮」が何を指すのか、寝殿なのか、敷地全体なのか。それによって、「つくる」が何を指すのかが違って来る。宮邸全体の基本構成に変更がなければ、総合的な補修管理と取るのが穏便かと思う。*「三条の宮の御倉(さんでうのみやのみくら)」は<三条宮邸>という初めての明示、かと思う。

*またも(その上、殿は更に御倉を)、建て添へさせたまひて(建て加えさせなされて)、さまざまの*御宝物ども(いろいろな御宝物で)、院の御処分に数もなく賜はりたまへるなど(朱雀院の御遺贈分として数多く賜わりなされた物などの)、あなたさまの物は(宮のお持ち物分は)、皆かの宮に運び渡し(皆その宮邸に運び移して)、こまかにいかめしうし置かせたまふ(手厚く厳重に保管させなさいます)。*「またも建て添へさせたまひて」は注に<源氏がさらにまた御倉を建て加えさせなされて、の意。「させ」使役の助動詞。三条宮邸の家司等をしての意。>とある。*「御宝物ども」は「おんたからものども」と読みがある。

明け暮れの御かしづき(今後の六条院での宮の、日々のお世話と)、*そこらの女房のことども(大勢いた女房の引き取りや)、*上下の育みは(かみしものはぐくみは、上位下位それぞれに応じ

た転職斡旋は)、おしなべてわが御扱ひにてなど(すべて殿の差配とすることに)、*急ぎ(管理体制を取り決めて)*仕うまつらせたまひける(殿は宮にお仕え申しあそばしました)。*「そこらの女房のことども」は注に<女三の宮付きの女房は五、六十人いる。>とある。二段の法事の場面で「狭き心地する仮の御しつらひに、所狭く暑げなるまで、ことごとしく装束きたる女房、五、六十人ばかり集ひたり」とあった。また、下の記述から以降は若女房の「十余人ばかりのほどぞ、容貌異にてはさぶらふ」(二章一段)という体制になるらしく、この「ことども」は<解雇された女房の引き受け>を意味するらしい。*「上下の育み」は何のことか分からない。が、文脈からして<育み=面倒=解雇者の転職斡旋>と解して置く。*「いそぐ」は<準備する→体制を整える>と解した。*「仕うまつらせたまひける」は注に<『完訳』は「お手入れをお進めになるのであった」と訳す。「つかうまつる」は、目上の人に~してさしあげるというニュアンス。「せ」尊敬の助動詞、源氏に対する最高敬語。>とある。殿自身が宮に仕える、という言い方らしい。確かに「わが御扱ひ」という言い方をしている。